様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０３４３

研究課題名（和文）同時代のパリにおけるラフカディオ・ハーンの受容に関する研究

研究課題名（英文）Research on the reception of Lafcadio Hearn in Paris around 1900

研究代表者
中島　淑恵（Nakajima, Toshie）

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：２０２９３２７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ラフカディオ・ハーン（1850-1904）は、その生前から、英語圏ではよく知られた作家であったといえるが、フランス語圏では没後に翻訳が発表されるようになってようやく知られる存在になったというのが従来の見方であった。ところが、翻訳の発表される前から、直接英語でハーンの著作を読み解いたフランス語圏の人々が、ハーンの影響を少なからず受けている例が見つかり、とくにその日本理解や仏教思想の解釈において影響があったことが解明できた。

研究成果の概要（英文）：Lafcadio Hearn(1850-1904) was a well known writer in the United States and in England while he was still alive, but he has been considered as unknown in France until french translations were published after his death. However, we discovered several examples which demonstrate an important influence of Hearn on the French literature of his contemporaries, especially in their understanding of Japanese culture and in their interpretation of Japasese Buddhism.

研究分野：フランス文学

キーワード：ラフカディオ・ハーン　フランス文学　比較文学　ベル・エポック　ジャポニスム

１．研究開始当初の背景

英語圏においては、ラフカディオ・ハーン（1850-1904）はその生前から、とりわけ日本の文化や日本人の心性の紹介者としてよく知られる存在であった。しかし、フランス語圏においては、ハーン死後の 1909 年頃からフランス語訳が発表されるようになってから知られるようになったというのが従来の見方であった。しかし、フランス語圏においても、ハーンがその著作を発表するのとほぼ同時に、英語圏の読者と同じ速さで、英語でそれらの著作を読み解いていた事例が見つかり、フランス語圏におけるハーンの受容は従来考えられているのよりも早く、その生前には既にあったのではないか、またその影響もこれまで考えられていたより大きかったのではないかということに思い至り、同時代の様々な著作にあたり、そのような事例をさらに渉猟するとともに、その影響のありようについて研究を行おうと考えた。

ハーンがその日本に関する著作によって西洋世界に紹介したものは、日本人の文化や生活習慣だけでなく、その精神性、また輪廻転生や地獄思想など独自の発展を遂げた日本固有の仏教思想などが挙げられるが、それらのものが、単に読まれただけでなく、小説や詩などの文学作品にどのように取り込まれたかについても考察を加えてみたいと思った。

また、ハーンはとりわけ俳諧に関心を寄せ、その著作の中で数多くの俳諧を紹介し、英語での解釈を寄せている。これに対してフランスでは、1920 年代以降には一大ブームとなるにもかかわらず、俳諧は和歌のような高尚な鑑賞に耐えるものではなく、一般人の手すさびのひとつとみなされ、受容の対象にすらならなかったと従来されてきた。それでも 1910 年頃から俳諧はピエール・ルイ・クーシューらによってフランスで紹介されるようになるが、ハーンの著作からもっと早い時期に俳諧を受容し、その短詩形式に新たな詩の可能性を見出そうとした作家たちもいたのではないかという可能性についても検討してみる必要があると感じた。

なお、申請者の勤務校である富山大学付属図書館にはラフカディオ・ハーンの旧蔵書の大部分を収めた「ヘルン文庫」がある。研究資源としてのこの文庫の活用法と、ハーンとフランスとの関係について一灯を捧げたいと考えたのも本研究を思い立ったきっかけであったことを付言しておく。

２．研究の目的

ハーンが日本についての著作を発表した 1894 年から 1904 年頃までにパリ（フランス）で発表された文学作品において、ハーンの影響がどのような点に認められ、その影響はどのようなものであったかについて調査・分析・考察を行う。

また、従来この時期には、美術上のジャポニスムはすでに終焉を迎えていたと言われているが、文芸上のジャポニスムはむしろこれ以後に反映していったのではないかと思われる。美術作品の受容が、言語の媒介を必要としない直接的なものであるのに対して、文学や思想の受容は言語を媒介とすることが不可避であるため、言語をよく理解し、文学作品を味読する層が育ってきて初めて可能になる領域だからである。日本文化の理解や日本特有の仏教思想の理解において、英語圏のみならず、フランス語圏においても、ハーンが日本で渉猟し協力者を得て収集した膨大な資料から得られた知見を英語で発信したことが、同時代のいわゆる文芸上のジャポニスムに具体的に影響を与えていたのではないかと推測されるため、その影響関係を検証するのも本研究の目的である。

３．研究の方法

富山大学付属図書館に収蔵されているヘルン文庫（ラフカディオ・ハーンの旧蔵書）のうち、ハーンの生前にフランス語で訳されたものとしては唯一のものである、フランスの雑誌に掲載されたハーンの作品『涅槃』とハーンの紹介についての分析を行う。

また、フランス国立図書館を中心に、当該の時代において出版された文学作品を中心とした著作、文芸雑誌等を渉猟し、同時代のフランスにおけるハーンの影響がどのような点に見られるか、あるいはどのようなものだったかについて調査・分析・考察を行う。

また、同時代においてハーンがどのようにフランスの文壇で知られ、評価されていたか、を探るために、フランス国立図書館において文芸雑誌・新聞等を中心に調査と分析を行う。とりわけその特徴は日本文化の紹介・日本固有の仏教思想の理解・俳諧の紹介の 3 点に特徴があると思われるので、当該の時代のこれらの要素についてとくに調査を行う。

これらのことを踏まえて、各資料をデータベース化するとともに、論考を行い、学会等において研究発表を行った上で、論文として取りまとめ、研究の成果を広く世間に公開できるように努める。

４．研究成果

本研究を遂行した結果、以下のような成果が得られた。

（１）　フランスで俳諧が文学の一形式として本格的に紹介されたのは、1903 年から 1904 年の間日本に滞在した医師ピエール・ルイ・クーシューによってであると従来言われていたが、ラフカディオ・ハーンの『骨董』は 1902 年に発表されており、その中に収められた「蛍」の中のほぼすべての俳諧のトランスクリプションをそのまま借用し、ハーンの英訳をフランス語に移し替えたものを、ポール・リヴェルスダール（詩人ルネ・ヴィヴィアンとその保護者エレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルト）がその小説『二重の

存在』の中で展開している事実が確認できた。この時点でこのような短詩形のことを「俳諧」と呼ぶという認識はポール・リヴェルスダールにはなかったようであるが、その情趣や内容、さらには奇数脚による短詩形の構成については、同じ作品の中で創作例が見られることから、従来言われていたのより早い時期に、ラフカディオ・ハーンの著作を経由してこの俳諧という短詩形文学の価値を見出していたフランスの作家がいたことを証明することができた。

また、同じ小説の「餓鬼」についても記述も、ハーンの『骨董』からの借用であることが証明できた。「餓鬼」の種類が列挙されているのは、ハーンも典拠としヘルン文庫にも所蔵のある「正法念書経」であるが、ハーンが『骨董』において自由に行っている取捨選択が、リヴェルスダールの作品においてもそのまま反映されていることを証明することができた。

さらには、「蛍」に象徴されるような無常観や日本人固有の美学や、「餓鬼」で示唆されるような輪廻転生や因果応報などの日本固有の発見を遂げた仏教思想が、その作品においては物語の進行上重要な役割を果たしていることも証明することができ、この小説におけるハーンからの引用が、単なる表面的な異国趣味に留まるものではないことを解明することができた。

（2）ハーンがその著作の中で西洋人に伝えようとした日本固有の仏教思想の数々については、たとえばエレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルトの名で 1911 年に出版された『最後の抱擁』において、さらに新たな展開を見せていることを確認することができた。この書物には、ハーンの著作だけではなく、アストン、チェンバレン、またジュディット・ゴーティエからの借用も確認できたのであるが、無常観その他の仏教思想は、ハーン由来のものであることも、その引用から具体的に確認することができたものである。そもそもハーンはフランスにおいては、『涅槃』の著者として初めて紹介されたものであり、もともと日本固有の仏教思想を紹介する者として認識されていたものと思われる。この点については、ハーン自身が仏教思想をどのように理解していたかについての精査と、特に地獄をどのように認識しているかについて、幼少時から青年期にかけて培ってきたダンテの『神曲』を中心とする西洋的な地獄観と日本の仏教における地獄観を比較検討し、その中からハーン固有の思想を抽出し、それがフランス文学に与えた影響について再度検討し直す必要性が生じている。

（3）これらの研究成果を取りまとめ、2013 年 7 月には、パリのソルボンヌ大学で開催された国際比較文学会において、「La reception de Lafcadio Hearn par ses contemporains parisiens(パリの同時代人たちによるラフカディオ・ハーンの受容について)」という題目で発表を行った。今日ラフカディオ・ハーンの名は、英語圏でもフランス語圏でも忘れ去られた感のある名前であったが、この発表によって、同時代の英語圏だけでなくフランス語圏においても、同時代の文学にハーンの与えた影響が意外に大きかったことが示唆され、海外の研究者たちの関心を引いた。このことは、いわゆる文学上のジャポニスムが、日本滞在経験者によって異国趣味や情緒だけを喧伝するようなものにはとどまらず、さらに深く日本人的な心性の理解や、仏教思想と比較してのキリスト教思想への懐疑などの問題意識を醸成するのに役立っている様子も観察することができた。

今後の展望としては、このようなハーン理解に基づき、深く影響を受けた作家やその作品のさらなる発見に努めるのと同時に、それがさらに後世の作品の中ではどのような変容を被っているのか、ハーンの影響はなかったと考えられるジャポニスムを標榜する作品とハーンの影響を受けたと思われる作品とではどのような点が異なっているのか、具体的に比較対照を行ってゆく必要もある。

また、ラフカディオ・ハーンとフランスとの関係については、未だ解明されていない点が多々あることについても、本研究を行っている途中で次第に明らかになってきた。すなわち、ハーンはアメリカ到着時にはすでにフランス語を不自由なく解し、クレオールの民話採集を行ったり、ボードレールやフロベールの作品の翻訳を発表したりしていたが、ハーンがどのようにしてフランス語を身につけたか、またフランスに滞在していたことはあったのか、についても未だ確証が得られないままである。

また、申請者の勤務校である富山大学付属図書館のヘルン文庫に収められた蔵書を見ると、とりわけ日本滞在時代のハーンが、同時代のフランスの作品を独自の基準で選択しかなりの速さで咀嚼していたことが分かるのであるが、たとえば 700 冊余を数えるフランス語文献において、ハーンはフランス文壇に助言者のような存在はいなかったのか、あるいは何を基準として蔵書を選択したのか、という問題についても考えてみる必要があることに気付いた。たとえば 18 世紀文学についてはヴォルテールの著作が若干あるだけでルソーの作品は全くないなどの不均衡が見られるのであるが、これについてはハーンの生きた時代においてそれらの作家がどのように受容されていたかについても併せて研究する必要があるかも知れない。

さらにハーンは、晩年には東京帝国大大学および早稲田大学で英文学を講じているが、その講義の中でしばしばフランス文学に言及し、フランスの詩を引用したりしている。これが日本におけるフランス文学の最初期の受容の契機となったことはまず疑いなく、受講学生たちの間にフランス文学受容の素

地が形成されたのは確かであろう。この当時すでに東京帝国大学には仏蘭西文学科が設立されており、そちらで講じられていたこととハーンがフランス文学について講義で述べていたことを比較対照してみることもまた意義のあることなのではないかと思われる。ちなみに仏蘭西文学科の講師はフランス人神父であり、晩年のハーンのカトリックとの対立の図式の中で、このことがどのような影響を及ぼしたかについても検討の必要があるように思われる。

将来的な展望としては、まずはハーン自身がフランス文学から被った影響を中心に検討し、次にハーンがフランス文学に与えた影響について考察すると同時に、日本におけるフランス文学受容にどのようにかかわったかについて解明することによって、ハーンとフランスとの関係を多角的に照射することができるのではないかと思われる。

ハーン研究は、これまで、英米文学系の研究者によって、主に英語圏との影響関係について研究されることが多かったように思われるが、このようにしてハーンとフランスとの関係に着目することで、これまで顧みられなかった新たなハーン像を提示することも可能になるのではないかと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）

① 中島　淑恵、詩の生成―ポーリーヌ・メアリ・ターン「コブレンツの思い出」を巡って―その 2、富山大学人文学部紀要、査読無、第 63 号、2015、印刷中（15 頁）

② 中島　淑恵、ラフカディオ・ハーンのヴィクトール・ユゴー評―子どもの詩を中心に―、へるん倶楽部、査読有、第 13 号、2015、3-11

③ 中島　淑恵、詩の生成―ポーリーヌ・メアリ・ターン「コブレンツの思い出」を巡って―その 2、富山大学人文学部紀要、査読無、第 62 号、2015、269-285
http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo62/nakajima62.pdf

④ 中島　淑恵、少女が大人になるとき―ルネ・ヴィヴィアン 16 歳の草稿から―、日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集、査読有、第 38 号、2014、69-88

⑤ 中島　淑恵、バルザックを読むハーン、へるん倶楽部、査読有、第 12 号、2014、9-12

⑥ 中島　淑恵、ボードレール『悪の華』初版における付加形容詞の前置について　①、富山大学人文学部紀要、査読無、第 61 号、2014、215-232
http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo61/nakajima61.pdf

⑦ 中島　淑恵、ルネ・ヴィヴィアンとラフカディオ・ハーン（２）―ポール・リヴェルスダール『二重の存在』における「餓鬼」の記述をめぐって―、富山大学人文学部紀要、査読無、第 59 号、2013、135-150
http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo59/nakajima59.pdf

⑧ 中島　淑恵、新聞記事「国民的忘恩」―全訳と論点整理―、へるん倶楽部、査読有、第 11 号、2013、7～14

⑨ 中島　淑恵、エレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルト『最期の抱擁』における日本―20 世紀初頭のフランス文学におけるジャポニスムの変容 ①―、富山大学人文学部紀要、査読無、第 58 号、2013、183-210
http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo58/nakajima58.pdf

⑩ 中島　淑恵、ルネ・ヴィヴィアンと日本の三人の女流詩人―ポール・リヴェルスダールの著作における小野小町・清少納言・加賀千代女の記述をめぐって―、富山大学人文学部紀要、査読無、第 57 号、2012、165-189
http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kenkyu/kiyo57/nakajima57.pdf

〔学会発表〕（計　3　件）

① 中島　淑恵、詩の生成ポーリーヌ・メアリ・ターン「コブレンツの思い出」をめぐって、日本比較文学会北海道支部東北支部第 4 回比較文学研究会、2015 年 3 月 28 日、東北大学片平キャンパスさくらホール（宮城県仙台市）

② 中島　淑恵　少女が詩人になる時―ルネ・ヴィヴィアン 16 歳の草稿から―、日本フランス語フランス文学会中部支部大会、2013 年 9 月 28 日、信州大学人文学部（長野県松本市）

③ Toshie NAKAJIMA, La reception de Lafcadio Hearn par ses contemporains parisiens, Association internationale de littérature compareе（国際比較文学会）, 2013 年 7 月 20 日、パリ（フランス共和国）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中島　淑恵（NAKAJIMA, Toshie）
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：20293277

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：